

体育科学習指導案

令和2年1月31日（金）第3校時（体育館）5年2組

I 題材 バウンドテニス

II 考察

1 題材観

(1) 育成を目指す資質・能力の三つの柱

①知識及び技能

バウンドテニスの行い方についての知識や、ストロークの動き、ボールを操作できる位置に体を移動するなどのボールを持たないときの動きの技能

②思考力、判断力、表現力等

ストロークの動きのポイントを見付けたり、簡単な作戦を選んだり、チームの課題の解決のために考えたことを伝えたりする力。

③学びに向かう力、人間性等

互いに協力したり、勝敗を受け入れたりして、練習やゲームに積極的に取り組もうとしている。

(2) 学習内容：学習指導要領上の位置付け

E ボール運動

(1) 次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。

イ ネット型では、個人やチームによる攻撃と守備によって、簡易化されたゲームをすること。

(2) ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。

(3) 運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたりし、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすること。

(3) 題材の価値

本単元は、「5の2バウンドテニス大会」に向け、相手コートに返球する動き（以下ストローク）という基本的なボール操作とボールを操作できる位置に体を移動するなどのボールを持たないときの動きによって、バウンドテニスに取り組む学習である。その価値は以下のとおりである。

バウンドテニスでは、ネットを挟んで相手コートにボールを打ち、互いにラリーを楽しんだり、相手と得点を競い合ったりすることに面白さや楽しさがある。また、攻守一体型のゲームであるため、味方へのパスといったプレーがなく、次のプレーが相手への返球のみと分かりやすい。そして、コート内のプレイヤーすべてが守りと攻めの動きの両方に関わってかけひきをしながら攻防をすることに楽しさや喜びもある。

バウンドテニスでは、ネットで区切られたコートの中で、相対するチームが攻防を繰り返すため、相手に邪魔をされたり、相手と接触したりすることがないという特性がある。しかし、返球の際に、ボールに触れられる時間が短いため、ボールの操作に困難さが出てくる。そこで、通常

のテニスボールより大きい直径13cmのボールを使用することや手の平より一回り大きいスポンジのボードを使用することにより、安定してボールに触れられる面が増え、ストロークを安定して行えるようになる。なお、本単元で扱うストロークとは、ボールを返球する際に体を開き、腕の振りと腰の捻転を使ってボールを肩より下で打つ動作とする。これらのことにより、バウンドテニスの行い方についての知識や、ストロークの技能を身に付けることにつながる。

バウンドテニスで攻防をするためには、個人の基本的なボール操作に加えてペアで連携して動くことが必要である。相手からのボールを受けやすい守備隊形を考えることや、返球で相手を前後や左右に揺さぶったり、緩急をつけてボールを返したりするような作戦を選ぶ中で、守りのポジションや相手への返球の仕方について自分の考えを互いに伝え合うことができる。

そして、「つかむ」過程で「5の2バウンドテニス大会」というクライマックスイベントを知ることによって、大会に向けてチームで協力し、お互いにアドバイスをし合いながらバウンドテニスに意欲的に取り組むことができる。

(4) 今後の学習

ここでの学習は、6年「ソフトバレーボール」で、レシーブ、トス、アタックといった基本的なボール操作とチームの作戦に基づいた位置に動き攻防する学習へと発展していく。

2 児童の実態及び指導方針

子どもたちは、4年「シュートプレルボール」において、プレルやシュートといった基本的なボール操作とボールを持たない動きによってシュートプレルボールをする学習に取り組んできた。これらの学習で明らかになった子どもたちの実態及び本題材を進めるにあたっての指導方針は、次のとおりである。

- ① シュートプレルボールの行い方を知り、プレルでボールをつなぎ、ねらった場所にボールをシュートしたり、ボールを操作しやすい位置に動いたりできるようになってきている。このような子どもたちがバウンドテニスの行い方を知り、ストロークの動きを身に付けることができるように、基本的なボール操作を練習する時間を毎時間設定する。
- ② 動きのポイントを踏まえ、シュートプレルボールにおける簡単な作戦を選んだり、考えたことを友達に伝えたりすることができるようになってきている。このような子どもたちが守備隊形を考えたり、作戦を選んだりする中で考えたことを友達に伝えることができるように、動きを可視化できるコートに4つのグリッドに分けた作戦ボードを用意する。
- ③ シュートプレルボールに進んで取り組み、友達のよい動きを認められるようになってきている。このような子どもたちが、友達のよい動きを認め、バウンドテニスに積極的に取り組めるように、男女混合の7～8人で構成されたチームを編成し、互いに動きを見合う機会を設定する。

Ⅲ 目標及び評価規準

Ⅳ 指導計画 ※Ⅲ・Ⅳについては、指導と評価の計画参照

Ⅴ 本時の（4／7時間目）

- 1 ねらい 相手からのボールを受けやすい守備隊形を考え、課題解決に向けた解決策を動きや言葉で伝え合うことを通して、相手からのボールを受けやすい守備隊形でボールを受けること

ができる。

2 準備 コートを4つのグリッドに分けた作戦ボード

3 展開

学習活動と子どもの意識	指導上の留意点
<p>1 本時のめあてをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none">・前のゲームで、相手からのボールが受けられなくて、失点してしまったからそうならないための守備隊形を考えていきたいな。	<p>○相手からのボールを受けやすい守備隊形でボールを受けられるようになるという学習の見通しがもてるよう、前時で見いだした課題を問いかける。</p>
<p>めあて「相手からのボールを受けやすい守備隊形を見つけて、チームで練習し、相手からのボールを受けられるようになるろう。」</p> <hr/> <p>「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿</p> <p>守りのポジションやストロークを生かした攻撃といったバウウンドテニスの特性に着目し、チームで目指す守備隊形でボールを受けるための解決策を伝えたり、プレーしたりしている。</p>	
<p>2 守備隊形のポイントを捉え、チームで考えた守備隊形を試す。</p> <ul style="list-style-type: none">・シュートプレルボールでは3人で、近づき過ぎないように守ったから、今回もペアと近づきすぎないほうがよさそうだな。・スペースに向かってボールを投げてね。ストロークできるように利き手側を少し広くとって構えてみよう。・相手から返ってくるボールが近くだったり、遠くだったりするからもう少しペアを前後にずらして受けてみよう。 <p>3 メインゲームに取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none">・相手が打つタイミングで、利き手側にスペースをとって、前後にずれて構えていたら、利き手側でうまくボールを受けることができたな。先生もいいプレーだと言ってくれたよ。 <p>4 本時のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none">・チームで守備隊形を考えて動いたら、相手のボールを受けられるようになってきたな。次は攻め方を考えていきたいな。	<p>○相手からのボールを受けやすい守備隊形のポイントに気付けるよう、シュートプレルボールにおける守備隊形のポイントを問いかける。</p> <p>(イ)</p> <p>○チームで守備隊形を考えることができるよう、ボールを投げてもらう、ゲーム形式といった練習方法をまとめた表を提示する。</p> <p>○チームで守備隊形の場所を伝えることができるよう、コートを4つのグリッド分けた作戦ボードを用意する。</p> <p>○取り組んだ動きに自信がもてるよう、守備隊形のポイントに照らした動きができていることを称賛する。</p> <p>— 評価項目 —</p> <p>ボールを受けやすい守備隊形をつくるために考えたことを伝えている。 <行動②></p> <p>○動きの出来映えと練習方法のよさを実感できるように「できるようになった動き」「よかった練習方法やアドバイス」というふりかえりの視点を提示する。</p>

指導と評価の計画（全7時間）

目標	互いに協力して、守備隊形や作戦を選びながら、ストロークの動きを用いてバウンドテニスができる。		
評価規準	(①知識・技能)バウンドテニスの行い方を理解し、ストロークの動きを用いてゲームをすることができる。 (②思考力・判断力・表現力等)ラリーを続けるためのポイントやストロークの動きのポイントを見付けたり、相手のボールを受けやすい守備隊形を考えたり、チームの特徴に応じた作戦を選んだり、チームの課題の解決のために考えたことを伝えたりしている。 (③主体的に学習に取り組む態度)互いに協力したり、勝敗を受け入れたりして、練習やゲームに積極的に取り組もうとしている。		
見方・考え方	バウンドテニス（攻守一体型）の特性に着目し、課題に対しての解決策を伝えたり、プレーしたりしている。		
過程	時間	学習活動	指導上の留意点
つかむ	1	○試しのゲームを行い、共通のめあてや自分のめあてを立てる。 ・共通のめあて 「5の2バウンドテニス大会に向けて、チームの課題に合った練習をして、ストロークの動きを身に付けてバウンドテニスを楽しもう。」	○バウンドテニスの中で取り組んでいく動きや学び方の見通しがもてるよう、「できるようになりたい動き」「学び方」「楽しく安全に運動するためにできること」の視点を提示する。
追究する	1	○ストロークの動きのポイントを見付け、ゲームに取り組む。	○ストロークの動きのポイントに気付けるよう、「かまえ」「腕の振り方」の観点を提示する。
	1	○チームでラリーゲームに取り組み、守備隊形の演習とチームで取り組んだ動きを動画で比較し、それを基にチームで守備隊形の課題を見いだす。(ア)	○安定したラリーをするためのポイントに気付けるよう、「狙う場所」の観点を提示する。
	1	○ 相手からのボールを受けやすい守備隊形を見付け、ゲームに取り組む。(本時)	○バウンドテニスにおけるボールを受けやすい守備隊形のポイントに気付けるよう、既習のネット型の守り方との共通点や相違点について話し合う場を設ける。(イ)
	1	○選んだ作戦を試し、ゲームに取り組む。	○作戦を選ぶことができるよう、「左右の振り」「前後の振り」「緩急」といった作戦例を提示する。
	1	○チームで選んだ作戦でゲームに取り組む。	○選んだ攻め方をペアで確認できるよう、ゲームとゲームの間に作戦を話し合う時間を設ける。
まとめる	1	○5の2バウンドテニス大会を行い、学習のまとめをする。	○学習の成果を実感できるよう、「できるようになった動き」「自分や友達の頑張っていたこと」という振り返りの視点を提示する。
			◇試しのゲームの感想や感覚を基に「相手コートに打ち返したい」「ラリーを続けられるようになりたい」などの具体的なめあてを記述している。 <学習プリント③>
			◇ボールをボードの面に当てて相手コートに返球することができる。 <行動①>
			◇ラリーゲームで相手の利き手側を狙って打つなどというポイントを記述している。 <学習プリント②>
			◇ボールを受けやすい守備隊形をつくるために考えたことを伝えている。 <行動②>
			◇作戦を選び、試している。 <行動②>
			◇ストロークの動きを用いてゲームをすることができる。 <行動①>
			◇できるようになった動きや自分や友達の頑張りを記述している。 <行動・学習プリント③>

バウンドテニス

～ルール～

ダブルス（2 V S 2）

サーブは手で相手コートに下投げで行い，相手はワンバウンドしたボールを打つ。

（サーブは得点にかかわらず，1回交代で行う，サーブでの失敗は互いに得点にはならない。）

相手からのボールはワンバウンドで打つ。

返球はラケットが肩より上に挙がらないようにして打つ。肩より上で打ってしまった場合，相手の得点とする。

ペアのどちらかが返球してもよい。

相手の得点となるのは，

- ・ノーバウンドで返球。
- ・返球した球がコートの外に出る。
- ・返球した球がネットを越えない。
- ・肩より上での返球。

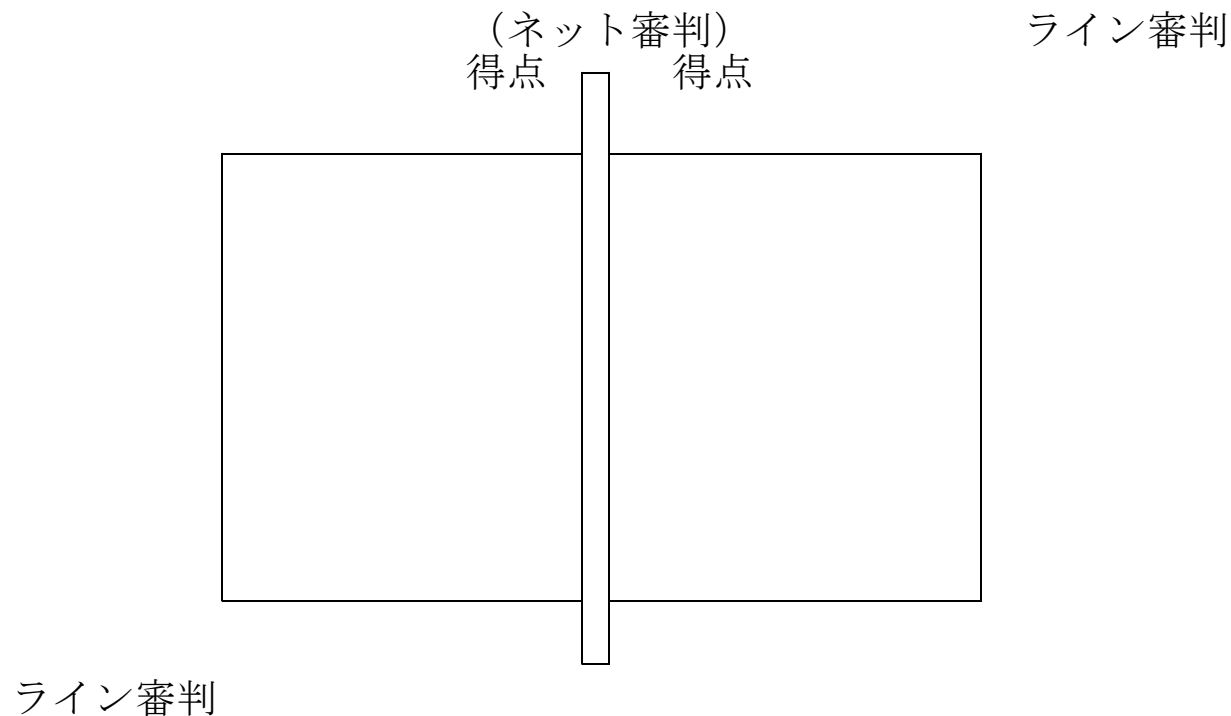
～ゲーム～

ゲームは3分で行い，得点が多い方の勝ちとする。

得点2人（ネット審判を兼ねる）。ラインを見る審判2人。…5人チームは1人ネット審判をする。

試合前後には礼とあいさつを行う。

ゲーム中に守備隊形を変えてもよい。



授業の流れ

ビブス→体操→慣れの運動→ブザー音で集合

慣れの運動

- ハーフコートラリー（チームで4カ所に分かれて打ったら交代で相手とラリー）
- ハーフコートクロスラリー（うまくなってきたら）